

バレーボールゲームにおける新ルールについての一考察

—実践指導の見地から—

孫 正衛*, 河野貴美子** (翻訳)

緒 言

新ルールの主な改正は、従来のサーブ権を持つ方が得点をあげるサイドアウト制からラリーポイント制への移行、リベロプレーヤーシステムの導入、ネットに当たり相手コートに入ったサーブを有効とするものの3点である。このうち最も大きな影響をもたらしたのは、やはりラリーポイント制の採用である。中国では'98-'99 甲 A リーグ (訳者注: 全国1部リーグ, 日本のVリーグに相当) から新ルールを実施し, 1999年の全国選手権大会からサーブのネットインも認めることを付け加えた。

およそルールが大きく改正されるときには, ルール改正がもたらす法則の変化をいち早く認識し, 的確な対応策を探し出したものが, 他をリードし, 先にチャンスをつかむことができる。これは歴史的経験が証明するところである。この新ルールをいかに正しく認識把握し, またいかに的確な対策を立てるかということは, 現在コーチングスタッフの間で緊急の課題となっている。

そこで筆者も甲 A リーグチームの第1線にあるコーチとして, これについて基本的な考察と比較を試みた。しかし我々にとっては, ここで行うバレーボール全般についての考察研究を, 我が上海男子代表チームという現場に結び付け実践指導していくことがより重要なのである。なぜならば我々の仕事はすべてチームの総合実践能力の向上を目標の中心にしているからである。

考察一 バレーボールにおける運動の基本的法則は変化なし

新旧ルールによる実際の試合の比較分析を通してみると, 新ルールはバレーボールの最も基本的な法則までも変えてしまうものではないと思われる。バレーボールの最も基本的な法則とは, チーム全体が攻守の全面的な力を備え, そのバランスがとれていること, また, 各選手がそれぞれ自分の特長を持つと同時に, さらにオールラウンドな技術を有していること, そして, 1つ1つの技術・戦術のミスが皆直接あるいは間接的に得失点に結びつき, それらが試合の勝敗に影響することである。

簡単に言うと, 旧ルールではサーブ側は得点することはあっても失点することはなく, サーブレシーブ側はサーブ権を得られるだけであって, ミスが出ると直接失点となってしまう。これに対して新ルールでは, 1つ1つのミスがみな直接失点となる。そこで旧ルールでは, 味方のサーブからのラリー, すなわち, 相手の攻撃を切り返す反撃(防反)が重要で, 新ルールでは相手方のサーブに始まるラリー, すなわち, サーブレシーブからの攻撃(一攻)をより重視すべきであると考えの向きがあるが, これには賛成できない。旧ルールにおいては, 相手の攻撃を切り返す力が, 相手のサーブレシーブからの攻撃力に勝っていても, サーブ権を得ることができなければ, 攻撃を切り返す力をどんなに持っているように, それを十分に発揮することはできなかった。一方新ルールにおいては, こちらのサーブレシーブからの攻撃がうまくいっても, 得点后相手のサーブレシーブからの攻撃を切り返すことができなければ, 再び得点は並ぶ。双方がサーブレシーブからの攻撃を成功させ続けた場合, 最後に2点差をつけて勝利を手にするためには, キーポイントにおいてやはり相手からの攻撃の切り返しに成功しないと勝てないということになる。従ってやはり攻守のバランスの取れたチームが優勢ということである。

ここ数年の中国甲 A リーグ, 全国選手権大会, そしてとりわけ日本で行われた今回のワールドカップ'99の試合結果は皆その例に漏れるものではない。伝統ある強豪チームがやはり優勢を占め, 他のチームをリードしているのである。アジアのチームのサーブレシーブからの攻撃は優れているので, 新ルールはアジアのチームに有利であるとこれまでは多くの人が考えてきた。しかし実際に新ルールによって変化したのは, 試合時間が短縮されたことのみである。

上海男子代表チームの実際の状況を見ると, サーブレシーブがセッターに戻る成功率が約65%に達し, また, サーブレシーブからの得点率が65%に達することが一つの目安となっている。つまり, サーブレシーブの成功率と, サーブレシーブからの攻撃の得点率が合計200分の130以上ということである。また, 相手の攻撃を切り返して35%以上攻撃に結び付けることができ, また, 相手側の攻撃において(こちらがサーブの時)36~37%の成功率につなげること, 同時に1セットにつき1~2点のサービスエース, そして1セットにつき2.5~3点のブロックポイントがある。もし上記の各項目が同時に±3~4%のレベルで達成さ

*上海男子代表チーム(上海有線電視台男子チーム)コーチ

**東京都立晴海総合高等学校

れば、我がチームは95%以上の勝機があると言える。しかし上述の指標の1項目または数項目において達成率が5%あるいはそれ以上落ちた場合どうなるかという、もしサーブレシーブがセッターに戻る成功率が60%を切り、サーブレシーブからの得点率も62%を下回った場合、上記の200分の130以上の成功率という数字は達成されなくなる。サーブレシーブの成功率とサーブレシーブからの攻撃の得点率が200分の120以下となり、また、相手側の攻撃を繰り返しての得点率が30%に届かなければ、ほとんど勝ち目はなくなる。旧ルールと新ルールを通して見ても、こうした結果はいずれの場合もほぼ変わらなかった。従って新ルールは、少なくとも現在の上海男子代表チームにとっては、バレーボールの運動の最も基本的な法則を変えるものではないと考えられるのである。

考察二 新ルールがもたらす影響

さて以上のように、新ルールはバレーボールの基本的な法則を変えるものではないと考えられるのであるが、もちろん今回のルール改正が一定の変化と影響をもたらすものであることは間違いない。我々はこのことについて冷静に、また客観的に認識し、適当な対策をとらなければならない。新しい変化と影響はおおよそ以下の面に及ぶものと考えられる。

1. 新ルールが練習に求めるより高度な要求

1つ1つの技術的、戦術的ミスが直接失点につながることから、各選手の個々のプレーがより磨かれ、より正確でなければならず、また、攻撃と守備のコンビネーションがより緊密かつ無駄なく行われなければならない。ラリーポイント制により、得点の変化が加速することで、試合に参加する選手の目に見えない心理的プレッシャーは大幅に増加した。大きなプレッシャーのもとで、より正確に各々の技術を発揮し、より合理的な戦術コンビネーションを組まねばならないということで、試合の難度は明らかに大きく増した。

選手の個別および総合的な実践能力を高めるには、適切な練習が行われなければならない。従って、新ルールは選手により高度なものを要求するというよりも、むしろコーチが行う練習プログラムにより高い要求を投げかけるものと言える。つまりコーチは今まで以上にオールラウンドな選手を育て上げ、またより正確で実践的な戦術的コンビネーションを作っていかなければならないのみならず、コーチはまた、選手の精神的トレーニングを強化し、選手がプレッシャーに耐えうる能力を高めていかなければならない。加えて、試合における得点の変化が速くなったことで、いかに最短時間の中で敵味方双方の問題を見つけ、できるだけ早く適当な対策を立てることができるかということや、タイムアウトを利用して即時的に限られた条件の中で調整を行わなければならないことも、我々コーチにとっては新たな高

度な要求である。

2. 新ルールは試合の全過程をより重視することが必要

ここ1年間あまりの我がチームの試合を見ると、奪ったセットの平均得失点は25.4:22.7であり、失ったセットは22.5:25.2であった。基本的に対戦相手のチームとは顕著な力の差はなく、勝負はほとんど約3点の差でついている。これはある程度新ルールが得点差を縮めていると言えるのではないだろうか。そこで今度は力の差が比較的顕著な試合において統計処理を行ったところ、得点は25:21, 25:19, 25:21であったが、これを従来のルールで計算すると、それぞれ10:5, 9:4, 11:7であり、新ルールは得点において明らかに強弱の差を縮めていることがわかる。

以上のことから、一部のコーチは新ルールのキーポイントは20点以後にあると考えている。私自身も統計処理を行ったが、24:20でリードしていれば、そのセットは95%はリードしている側の勝利となっており、こうした観点を論証づけているようである。

しかしこうした見方も全面的なものではないと考える。なぜなら、20点以後に2点3点とリードすることは確かに重要ではあるが、この2,3点のリードはセットの初めから全力で戦って作っていくべきものであり、その小さな積み重ねがあってこそ最終的な勝利へと結び付くのである。我がチームの経験からすると、セットの初めから力を発揮し、セットの途中の段階、および1球1球の過程をすべて重視していかなければならない。少しでも気を抜いたり、相手のミスを待つような気持ちになると、リードを広げられないのみでなく、かえって相手にリードされ、20点以後には追いつくのが難しいという状態になってしまう。これに比べて、従来のルールでは途中で少々気持ちが弛んでも挽回の余地はあり、14:10とリードされてから逆転して勝つということもあり得た。しかし新ルールでは逆転は難しい。試合は結果を求めるものではあるが、結果はそれまでの過程を通じて獲得するものであり、1球1球の過程を重視した方が、間違いなく勝算が高いのである。

3. リベロプレーヤーについて

リベロプレーヤーシステムの導入によって、守備を苦手とする選手の弱点をある程度カバーすることになった。これによってコーチたちも、守備に問題はあるもののネット上の攻撃やブロックを得意とする選手を起用しようと考えているようになっていく。中には、高身長選手はネット際のプレーのみを練習すればよく、後衛はリベロプレーヤーに任せればよい、と考える者もいる。

しかしこうした考えには絶対に賛成できない。なぜならば前衛の選手であってもブロックやスパイク以外に、守備や細かいプレーの場面は多くあるわけで、さらにサーブの後の守備はリベロプレーヤーと交替することができないので、攻撃は良いが守備は弱いという状況は必ず落とし穴になってしまう。新ルールによって得点差は縮まり、1点2点の失点の積み重ねが往々にして敗戦に結びついてしまう

のである。

我がチームについて言えば、このような選手は、旧ルールにおいては交替要員として起用することもできたが、現ルールにおいては完全に起用できなくなってしまった。今回のワールドカップ'99の強豪チームを見ると、高身長選手の守備でさえアジアの低身長選手の能力を上回っており、もし我々が一面的に発展させる道を選ぶのであれば、その差は間違いなくさらに拡がってしまうであろう。

新ルールが採用されてからまだ時間が短いため、各チームともリベロプレーヤーの練習はまだ系統だっで行われておらず、語るべき経験も乏しい。我がチームのリベロプレーヤーについて見ると、サーブレシーブの成功率は基本的にチーム全体とほぼ変わらず、また、サーブレシーブや守備に関わる比率は平均で約4分の1から3分の1に過ぎず、現在の世界の強豪チームに比べれば明らかに低い。従って、いかにリベロプレーヤーを育て、またいかに守備のコンビネーションを高め、リベロプレーヤーの各ローテーションにおけるポジションをどうしていくかといったことは、現在の上海男子代表チームが直面している新しい課題である。

4. サーブについて

従来のルールではサーブミスは失点とはならず、サーブ権を失うのみであったので、多くの選手は思いきって攻撃的なサーブを打っていた。しかし新ルールではサーブミスはそのまま失点となるため、サーブを「入れにくい」ようになり、その結果、相手のサーブレシーブからの攻撃を防ぐことは難しさを増した。攻めのサーブでいくのか、安定したサーブを基本とするのか、20点までは攻めていくのか、20点以後は入れていくのか、人により考えはまちまちである。

大局的に見ると、アジアのチームのサーブとサーブレシーブが欧米の強豪チームに劣るのは疑いのない事実である。我々のチームの現状を見ても、国内の強豪チームに及ばない。筆者は、サーブとサーブレシーブのレベルアップは我がチームにとってまず早急に解決すべきポイントであ

ると考えている。また、安定したサーブを基本としてそこから得点を狙っていくべきである。さらに、チーム内のサーブの多様化に加え、点と線の変化を増やすことが必要であり、このことはまた今後新たに研究する余地を残しているものと考えられる。少なくとも我々は現在、問題の所在については確認できている。サーブとサーブレシーブは1対1のものであり、サーブを強化すれば、それはすなわちサーブレシーブのレベルアップにつながるものであり、一石二鳥なのである。

5. ベテラン選手とチームの新旧交替について

新ルールによるゲームによって、選手たちはあらゆる面においてより高度なものを要求されるようになった。しかし試合時間は短縮されたため、ジャンプや移動の回数や量は減り、選手に求められる体力は相対的に減少した。これは明らかに経験豊富なベテラン選手にとって有利な条件である。実際、20:20といった場面で、豊富な技術を持つベテラン選手が重要な役割を果たすことがたびたびある。従って筆者は、おおむね27,8才前後で男子選手が引退していたこれまでの中国の現状を改めて考え直すべきではないかと思っている。世界を見ると、27,8才はちょうど中心選手として活躍している年齢である。チームの新旧交替も徐々に行う必要がある。ベテラン選手が若手を導くという段階的な世代交替が合理的であろう。

結 語

新ルールはバレーボールが持つ基本的なしくみ、法則を変えてしまうものではない。しかしやはり一定の変化をもたらすものであることは否定できない。我々はその変化を正確に把握し、それに対応していくための実践練習を重ね、局所的な強化を行っていかなければならない。こうした課題への取り組みを我々はまだ始めたばかりである。我々の研究はまだ浅く、一面的なものであり、今後はさらに多くのデータを収集し、より広くかつ多角的に分析していかねばならない。